

生体肝移植が始まった頃： 超音波ドプラ検査の思い出



中村武史

関西電力病院 消化器内科

〔略歴〕

なかむら たけふみ

中村 武史

関西電力病院 統括内科部長（兼消化器センター長）（京都大学医学部 消化器内科臨床教授）

1979年 京都大学医学部卒業

1988年 京都大学大学院医学研究科終了後、赤穂市民病院勤務

1996年 京都大学消化器病態学講座（千葉 勉教授）設立に参加（初代病棟医長）

1999年 北野病院消化器内科部長、天理よろづ相談所病院内視鏡センター長を経て

2009年 より現職

専門領域

肝硬変、門脈圧亢進症の病態と治療

受賞

“Arnold Holmes Award 1999; The Best Scientific Paper in 1998” by Journal of Clinical Ultrasound

Title: Measurement of abdominal arterial blood flow using B-mode combined Doppler ultrasonography.

平成の初めに京都大学で生体肝移植が始まって間もない初夏、大学院を終え赤穂市民病院に一人医長で赴任していた私に京大の森安史典先生（現東京医大教授）から電話があった。数日後の肝移植手術日に出張するので術中のドプラエコー検査を代行するようにとの事であった。

私は外来や検査の予定を調整して勇んで出かけた。

朝早い新幹線で大学に着いた私は、古いレンガ作りの内科第一講座病棟から重い東芝SSA-270装置を長い廊下を押し何度もエレベータを乗り継いで手術室に運び込んで待機した。

手術は午前9時に開始され、総監督が外科第二講座小澤和恵教授、recipientを田中紘一講師（後に移植外科教授）、donorを山岡義生講師（後に外科第二講座教授）が担当された。手術台は二重三重の人が取り囲み、とても若造の内科医が見学できる状況ではなかった。

患者は胆道閉鎖症の男児で生後早い時期にKasaiの手術を受けていた。癒着剥離に時間を要し移植肝が運び込まれた時には開始から約10時間が経過していた。

肝静脈の縫合に続いて門脈の縫合が終了して初めて私が呼ばれた。手術野に生理食塩水を満たしprobeを持った。手術野でのドプラエコー検査はそれまで十分に経験しているつもりであったが、移植手術での検査を自分ひとりで行うのは初めてであった。恐る恐る縫合された門脈一恐らく大伏在静脈をgraftとして使われたと思う一probeをあてるがmonitorにはまったく血流信号がない。どんなにprobeの位置を変えても血流信号が拾えない。「流れていません!」と正面の田中紘一先生にお伝えすると『血流がないのは縫合の不成功が原因』と判断された田中先生が縫合糸を一旦切り丁寧に再縫合された。一時間経っただろうか、再度手術野に入った私がもう一度probeを当てても矢張り血流は同定できない。

私:「流れていません」

田中先生:「本当にそれで血流が分かるの?」と語気強く

私:「分かります」。

周辺には一瞬の沈黙・・・

状況を見られた総責任者の小澤先生は「今までも内科の先生の超音波血流所見で何度も助けて貰ってきたのだから信じなくてはいけない」と仰り「ここで皆手袋を外して頭を冷やせ」との号令がかかった。二人の若

い外科医を手術野に残し私も含めて全員が一旦不潔になり、小澤先生に言われるまま、手術室のタイル張りの床に胡坐をかいた。当時の手術室には壁一面にシャウカステンがあり、小沢先生のご指示で血管造影写真を全部見直すことになった。

「何か意見があるものは？」と小澤先生、挙手をした私は「側副血行路に血流が逃げて門脈に血流が流れていない可能性があります」と。卒後10年前後の若い外科の先生方が賛成意見を言って下さった。

小澤先生の決断でまず脾門部の血行郭清が行われ約2時間後に私が手術野に。今度こそ!とprobeを当てたが血流は同定できるが流速がピークでも数cm/secでドブラ音もいかにもか細い。「今度は血流がありますが遅いです」と私。「もういいだろ」との意見もあったが、外科の若手の先生方と私の意見を採用してくださりKasai手術時に作られた胆汁瘻部分の腸管周囲の側副血行廓清が行われた。

そして1時間半、手術野に呼ばれprobeを当てると流速はピークで約20cm/secと十分、ゴォーという心地よいドブラ音が聞かれた。

「十分に流れています」と私、思わず拍手が沸いたが、ゴム手袋の拍手なのでペタペタと情けない音であった。最難関を越えた手術はその後順調に進捗し、しばらくして血管の手術は終了し私の出番は終わった。

手術棟を出たころには夜が明け始めていた。朝の新幹線で飲んだコーヒーの味は忘れられない。

私のような30歳台の若造、しかも部外者の所見や意見を採用していただいた多くの先生方、そして小澤和恵先生に改めて感謝申し上げたい。